

慈悲に聖道・浄土のかわりめあり。聖道の慈悲というは、ものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもうがごとくたすけとぐること、きわめてありがたし。浄土の慈悲というは、念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲心をもって、おもうがごとく衆生を利益するをいうべきなり。今生に、いかに、いとおし不便とおもうとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏もうすのみぞ、すえとおりたる大慈悲心にてそうろうべきと云々

第2組 清浄寺住職

波佐谷 宏昭

第4章「助けるとは、

助かった人間になることである。」 text by Hiroaki Hasatani

慈悲

『歎異抄』第四条では、「慈悲」いうことが、とり上げられています。もともと慈悲という言葉には、慈は「楽を与える」、悲は「苦を抜く」という意味があります。その場合の「苦・楽」は私達にとって都合のよいのが楽であり、都合の悪いものが苦であるということではありません。私達人間にとって都合の良いことを実現するのが慈悲ではなく、さとの智慧によって、真実への目覚めを促すのが慈悲であります。第四条では、「聖道の慈悲」「浄土の慈悲」と慈悲を二つに分けていますが、どちらも、仏道を歩む上での課題であるならば、慈悲の内容は、「仏の教えによって、他者を救う」ということが基本であるといた

聖道の慈悲

「聖道の慈悲」の聖道とは、自らの努力によって、煩惱を断ち、悟りを得ようとする仏道であり、それはいわば、向上心を原動力として、理想を追求する仏道です。そして、その精神によって他者を救おうとするのが聖道の慈悲です。人間は、よりよく生きようとするとき、先ず、自らの努力によって向上を目指すという、聖道的な在り方をとるのでしょう。

「聖道の慈悲というは、ものをあわれみ悲しみ育むなり。」聖道の慈悲とは、衆生をあわれみ、悲しみ、育むことであるといわれます。慈悲の対象を外におき、「自分は慈悲を行ずるもの」として自力を尽くすのが聖道の慈悲です。しかし、「しかれども、おもうがごとくたすけとぐること、きわめてありがたし。」と、思うように助け遂げることは、ほぼ不可能であるといわれます。それは「さとり智慧によって、真実への目覚めを促して根本的に救ってあげたい」という願いがあっても、濁った世に生きる私達が、自らの力で煩惱を断ち、さとりを得ることは困難であり、「自ら善根を積んで、功德を他者にふり向きたい」と善行に励んでも、思い描いたように他者を救うことは、出来ないということなのでしょう。

どんなに素晴らしい理念、素晴らしい教えであっても、時代社会や身の事実に相応しなければ、人間が救われる道にはならない。そのことを本当に思い知ったとき、阿弥陀仏の本願に心が開かれていく。それを「かわりめあり」といわれているのでしょう。

浄土の慈悲

「浄土の慈悲」とは、私が阿弥陀仏の本願を信じ、念仏申す身になることが、周りの人々に如来のはたらきをする、その身を通して「如来が衆生を利益する」ということです。安田理深先生は「助けるということは、助かった人間になることである」と、おっしゃいました。自分自身が助かった人間になれば、それは、必ず他の人々の上にまではたらいっていくということなのでしょう。

「いそぎ仏になりて」とは、この身のままで、本願を信じる身となるということです。なぜならば、本願を信じる身となるということは、煩惱を抱えたこの身のままで、如来のはたらき、如来の智慧をたまわることだからです。信心の智慧をたまわった人は、自らの迷いを迷いと知り、人生の方向が浄土へと定まった生き方をされる。その生き方、その歩みが、如来の徳を伝えるはたらきをするのです。信心の智慧をたまわった人に出会うと、そこに一つの灯を感じ、その人をとおして如来のはたらきを感じる。そういうことが「衆生を利益する」ということなのではないかと思えます。